

# いじめ撲滅劇参加による中学生の変容

## —短期的および長期的時間経過後の振り返りから—

専攻 人間発達教育専攻  
コース 教育コミュニケーション  
学籍番号 M 1 4 0 1 9 K  
氏名 富田幸子

### 1 問題と目的

青年期の入口である思春期という時期を過ごす中学生は、まだ揺るぎない価値観も形成できず、たえず他者の目を気にしながら生活する様相がみられる。

そんな中学生の学校生活を脅かすものとして、いじめ問題があげられる。いじめは人の心に深刻な傷を与えるものであり、昨今はネット上でのいじめも加わり、教師も保護者も実態を把握しにくい状況がうまれている。

そうしたいじめに対処するものとして、A市では、平成19年度より開発的生徒指導の一環として、全12中学校の生徒会が参加する中学生サミットを立ちあげ、年に1度のペースで、いじめ撲滅劇を上演している。筆者は、長年そのいじめ撲滅劇に携わり、劇参加後の生徒たちがどのような変容をとっているのか、明らかにしたいという思いを温めてきた。

そこで、本研究では、【研究1】として、このいじめ撲滅劇に注目し、そこに参加した中学生にどのような意識や行動での変容があるのか、とりわけ、劇参加後にいじめ問題をどう捉え、さらに中学生生活全般においても、どのような変容がみられるかを検証する。

【研究2】では、このいじめ撲滅劇に参加した卒業生を研究対象とする。劇参加から6年という時間が過ぎる中で、現在の生活や未来に向けての展望に対して、劇参加経験が、どのような影響を及ぼすかについて明らかにすることを目的とする。

### 2 方法

【研究1】では平成26年度の劇参加者を対象とし、計3回の調査を行う。【研究2】では平成21年度の劇に参加した卒業生にインタビューを実施する。より詳しい、具体的な方法については、下記のTableで示すこととする。

### 3 【研究1】の結果と考察

劇上演前、直後、劇上演より7・8ヶ月後に行った3回の調査で得られたデータは、すべてM-GTA(木下, 2003)の質的研究法にのっとり分析を行った。

【研究1】では、参加者の発話を4つのステップに分けて分析を行い、概念・カテゴリーを生成した。質問紙では、質問項目ごとの分析も行ったが、項目にとらわれず生徒の意識の様相をとらえる記述に注目して検討を行った。

#### (1) 3つの時点で生成された概念とカテゴリー

上演前は『他中生との交流の期待』『いじめをなくしたい』『変わりたい願望』など16個の概念が、上演直後には『いじめる側の気持ちの理解』『い

Table いじめ撲滅劇参加者・参加卒業生対象の調査の概要

	実施方法	対象者	実施時期	質問項目
研究1	第1回調査 質問紙	平成26年 劇参加者 (22名)	第1回練習 直前(5月)	劇参加の動機/今回のいじめ撲滅劇での目標/ 劇参加での自分の変化の予想
	第2回調査 質問紙		劇上演後 (8月)	いじめ撲滅劇の魅力/劇参加中での気づき/ 劇参加での自分の変化/参加体験が及ぼす今後の影響
	第3回調査 インタビュー		劇上演より 7・8ヶ月後	今も、劇のことを思い出すことがあるか?(5件法での調査)/いじめ めに対する行動は?/人との接し方で変化は?
研究2	インタビュー	平成21年劇に参 加した卒業生 (8名)	劇上演より 6年後	6年前の劇の記憶(5件法での調査)/今、打ち込んでいるもの/将来の 目標/高校以降のいじめ体験/自分にとってのいじめ撲滅劇の意味

じめられる側の気持ちの理解』『人とつながり』など18個の概念が生成された。さらに、上演から7・8カ月後の分析からは、『継続中の交流』『参加者の親密性』『他者の気持ちの理解』『いじめ解決への行動』という16個の概念が生成され、それらはカテゴリー、上位カテゴリーに分類した。さらにそれらの相互の関連を結果図及びストーリーラインに示した。

## (2) 参加者が劇に求めるもの

劇上演前の参加者たちには、この活動を通して、『他中生徒の交流の期待』や変わりたいという『自己成長の願望』が強くみられた。いじめに対して、当初より「いじめはよくない」というイメージ的なものを抱いていた。

## (3) いじめ観及び他者との関わり方の変容

劇上演後の調査からは、演劇独特の「他者になる」という活動から心の揺らぎが起り、今の中学生が抱きがちないじめの原因をいじめられる本人に帰属させるいじめ観との決別など、いじめをなくしたいという、より強い意識の変容が見られる者が多く存在した。

その後、劇から7・8ヶ月後の調査では、劇の活動の中で、他中生と親密な関係を築けた自信が実際の生活の場でも生かされ、他者に対して積極的な関わりを持つ者がいた。さらに、2学期以降の行事などでの活躍や次年度（高校入学や進級）に向けての挑戦的な姿勢もみてとれた。ただ、いじめに関しては、いじめを止める行動が出来た者、出来ない者に分かれた。出来なかった要因としては現在の友人関係や過去のトラウマが考えられた。

## 4 【研究2】の結果と考察

### (1) インタビューから生成された概念とカテゴリー

【研究2】では、同じくM-GTAの研究法にのっとり『いじめへの敏感な態度』、『居心地の良さ』『ひとつの転機』、『人と積極的な関わり』『働く上でのやりがい』など計16個の概念が生成された。劇参加から6年という時間が経過しているものの、

エピソードも含めていじめ撲滅劇の記憶は「かなり残っている」と答えた者が4人いた。

## (2) 過去の劇参加による影響

劇の参加経験が、進路決定をする際の支えや、現在の生活の適応、人との積極的な関わりなど、過去および現在の生活に影響している実態がみられた。更に、職業選択を通じて、未来を積極的に考える志向性もうかがわれた。

6年前に、劇の取組を通じて円滑な人間関係を築き、いじめについての認識を変容させた経験が自己概念として残り、それらを自分の中で増幅させながら自己形成をしてきたことが示唆された。

## 5 総合考察

2つの世代の劇参加者を比較することで、同調的、自己防衛的ともいわれる思春期の友人関係が浮き彫りとなり、義務教育でのいじめ対策が大きな課題であることが改めて明らかとなった。その方法も従来の教師の指導のみでは有効な対処とはいえず、子どもの力を引き出す主体的な活動が求められる。梶田(1996)は、子どもの成長を「外的に表れる表面的な変容からでなく、その裏にある内的な変容を見ていく」ことの大切さを指摘している。他者の気持ちの理解や自己の気づきにもつながる有効な手段である演劇活動など、他者との関わりが豊かになる多様な活動を、学校現場は積極的に仕掛けていく必要がある。そうすることがいじめ問題への対処だけでなく、将来に向けての豊かな自己形成にもつながると考えられる。

## 6 本研究の課題

本研究で明らかになった参加者の変容には、劇だけの影響とはいえないものが含まれている可能性も考えられるが、劇参加後に2回、そして卒業生にも対象を広げ、劇参加の影響を長期的に検証したことは大きい。今後この取組をどのように一般化させていくかも課題としていきたい。

主任指導教員 中間玲子

指導教員 中間玲子